

5月に開催された校長先生方の会議の中で、中学2年生が幼い、中学生になりきっていないという話題が出された。それは、昨年度、1年生だったときに、コロナ禍の影響で学校が休校になったり、全校生が一堂に会する機会がなかったりしたことが要因ではないかというのである。同様のことを複数の校長先生方が話してくださった。「なるほど、そういうことか」と思った。

4月に本校の2年生を見たときに、幼い、子どもだと思わせる生徒が多いと感じた。それは、たまたまだと理解していた。ところが、前述の話聞いて、合点がいったのである。

教員は、改善を加えながらも、年間に何度も全校生が一堂に会する行事や活動を位置付けてきた。毎年のことなので、その意義を改めて考えることもなかったかもしれない。それが、昨年、今年と通常ではない状況に追い込まれたことで、自分たちがやってきたことの意義が浮き彫りになったというわけである。生徒たちには申し訳ないが、教員にとっては勉強になった。

人が成長する上では、ロールモデルが必要である。例えば、教員の場合、あの先生のようにになりたい、あんな授業がしたいという存在である。教頭になれば、お世話になった教頭先生の姿をイメージすることだろう。校長も同様である。あの校長のようにになりたいという見本、モデルが欲しいのではなかろうか。

中学生であれば、上級生である。特に3年生である。下級生のロールモデルとして認められる。それこそが真の先輩と言える。だから、先生方は、自ずと3年生への要求水準が高くなる。「3年生がちゃんとしてくれない」という発想である。「〇年生では」という話もよく聞く。私は、これをよしとしない。学年がまとまることはいいが、指導においては、学年の壁はいらない。学校内においては、まだいいが、対外的には「〇年生では」という話は通用しない。

部活動においては、昨年度の夏の中体連大会がなくなってしまったことも大きい。3年生にとっての最後の大会を1・2年生が見ていないことの影響もある。

本校では、部活動紹介や生徒総会、選手激励会をリモートで実施した。一堂に会することができない中での苦肉の策である。全校集会等を放送で行うことも多い。今後も、これが通常だとは思わないようにしたい。

中学校は、大人の学校ではない。大人になるための学校である。幼く、子どもだった生徒が、少しずつ大人へと成長していく場なのである。小学7年生だった中学1年生も徐々に中学生の顔になってきた。それだけの経験を積んでいる。モデルとしての2・3年生の存在も大きいのだろう。

幼かった中学2年生も、変わってきている。様々な活動で、主役が3年生から2年生へとバトンタッチされる。自覚が出てきて意識も変わっていくだろう。今までの中学生とは、違ったステップを踏んできた2年生である。かえって身につけることができたり、考えさせられたこともあるだろう。その結果、思いやりやたくましさを獲得するかもしれない。

イレギュラーやアクシデントが決してわるいわけではない。大切なことは、置かれた状況から、何を考え、どんな行動をするかである。乗り越えることで身につくことがある。2年生を含めて本校の生徒が少しでも成長できるように、これからも最善かつ最適の道を探っていきたい。